

修 士 論 文 の 和 文 要 旨

研究科・専攻	大学院 情報システム学研究科 社会知能情報学専攻 博士前期課程		
氏 名	本瀬 有司	学籍番号	0951025
論 文 題 目	医療現場におけるダブルチェック手法の有効性の実験的検証と体系化		
要 旨	<p>日本医療機能評価機構の医療事故情報収集等事業が発行した平成 21 年年報によると、同年の 1 年間で医療事故は 1895 件生じ、156 件の患者が死亡に至った。その多くが確認作業により、エラーが発見できず、医療事故を防ぎきれなかったケースであった。</p> <p>医療現場では事故未然防止策としてダブルチェックを採用している。しかし、複数のダブルチェック手法を比較する網羅的な検証がなされた先行研究はなく、同じ内容を繰り返し確認する経緯で依存心に焦点を当てた心理学的要素の強い実験がほとんどである。従って、医療現場でダブルチェックを採用する場合に、複数の手法を定量化された指標で比較し、採用する上で参考に来るような先行研究が存在しない。また、安全上の観点から各場面で適切なダブルチェック方法を提案した例は見られない。</p> <p>そこで、本研究では医療事故発生の多い与薬作業に着目し、多様なダブルチェックの各手法の有効性を明らかにし、体系的に整理することを目的とした。具体的には、医療現場を想定とした被験者実験により、医療現場で採用されている 8 つのダブルチェック手法を作業精度と所要時間という 2 つの評価関数で効果を明確に定量化した。その定量化した評価関数と手法それぞれの特徴から、実際の現場で実施されている確認作業にどの手法を適用することが望ましいか提案した。</p> <p>第 2 章では、与薬作業の現状把握のため A 病院でヒアリング調査をした。また、被験者実験の方法を設定する際、必要な情報を得るために B 病院で実際に現場の確認作業に立ち会い、情報収集した。</p> <p>第 3 章では、第 2 章での調査を反映させ、医療現場に近い想定の実験の方法を設定した。本研究では、各確認作業の作業精度と所要時間という評価関数に対するダブルチェックの効果だけでなく、確認作業が他の作業へ及ぼす影響についても着目した。</p> <p>第 4 章では、第 3 章で設定した方法で被験者実験した。65 人の被験者の協力を得て、8 手法の確認作業のデータを収集した。このデータを分析し、結果に基づいて考察した上で、人員や時間といった制約下で推奨される手法を提案した。さらに、各確認手法の利点と欠点をまとめた。</p> <p>第 5 章では、本研究と先行研究の結果をまとめることで体系的に整理し、両者の結果について比較検証した。その上で、医療現場の現状調査に基づいて与薬作業の確認作業の場面別に最適な手法を提案した。このような方法を用いることで全国どの病院においても、最適なダブルチェックの採用について検討が出来る。</p> <p>最後に第 6 章として、本研究をまとめ、本研究の留意点と発展可能性について述べた。</p>		